

賞 門司 健 賞

課題（テーマ） 地域から世界へ

「辺野古で学ぶ」 沖縄県立球陽高等学校 3年 上原夏美

2017年8月9日、初めて辺野古基地建設反対座り込み運動の現場に行った。辺野古とは沖縄県名護市に位置する、政府が普天間米軍飛行場廃止と引き換えに新たに基地を設置する最適の立地として丁度今仮設建設がなされている場所である。県民投票により新基地建設反対の意思表示が確立されたが、日本政府は民意を見ぬふりをするかのごとく新基地の建設を強行している最中である。以前にも親と辺野古の海を見に来たことがあるが、今回の目的は目前のアメリカ留学を前に、沖縄の長年の問題である米軍基地や現在進行中の辺野古の新基地建設における、よくニュースで見かける座り込み運動の実状を、現地に自ら赴くことで学び、体感することであった。沖縄で一番の問題となっている基地問題を理解せずにアメリカへ交換留学をしに堂々に行けないと感じたからである。結果的に述べると、実際には私は座り込み運動に参加していない。はたまたその現場も見ることができなかった。

島ぐるみ議会という名のグループに参加させてもらい、那覇からバスで辺野古へと向かった。グループのメンバーを除くと私を含め3人の参加者がいた。勿論若者は私一人であった。よほど高校生などの若者が一人で参加しにくるのが珍しいのか、終始皆の注目の的であり、バスの中でスピーチを迫られたほどだ。大変緊張したが、参加を決意した理由や意気込みを発表した。あえて辺野古基地移設に関する自分の正直な意見を述べなかった。アウェーな気がしたからである。今回の目的は主張をしに行くのではなく、学びに行くのだと自分に言い聞かせながらバスに揺られた。彼女達は私に対して非常に優しく接してくれて、いわゆるカメーカメー攻撃（沖縄のおじいさんおばあさんが、なんでもかんでも持って行きなさいと言わんばかりに物を与えること）をするかのごとくパンフレットやパンやバナナやヤクルトやら色々くれるのである。しかしそんな優しい彼女達であったが、皆驚くほどのパワーと熱意を持っているようだった。

現地に着くと、見慣れた背高いフェンスの向こうに機動隊の姿が見えた。音声マイクを手でフェンスに抗議幕を貼るのは違反だと言って今すぐ除去するようにと繰り返し警告している。抗議をする人々は「黙れ！」と言いながら“NO BASE”と書かれた幕をフェンスに貼り付ける。そのように直接言い合う光景は初めてであったため、現場に来たのだという実感が湧いた瞬間だった。毎度の光景なのか、私だけが緊張感に包まれた。道路を挟んだフェンスの反対側に集会所があり、100近い人数が座っていた。ほとんどがお年寄りである。中学生くらいの青年を一人見かけたが、私と彼以外はほとんど皆年配であった。

勿論その集会所というのはしっかりとした建物でもなければ扇風機があるはずもなく、ただ木々の麓にテントと椅子があるだけである。灼熱の太陽のもと、蟬の声を十分に浴びながらフェンスと向かい合う。たまに道路を走る迷彩色の米軍トラックが颯爽と通り過ぎ、それを人々が睨む様子が生々しかった。私の側に終始居てくれた佐々木さんという方が紹介してくれた女性と会話をしながら昼食をとった。なんとその方というのがオール沖縄(県全体が一体となって新基地建設を阻止しようと活動する組織)の共同代表である高里鈴代さんという著名な方らしく、私の質問に対して細かく答えてくださった。私がアメリカの高校生に沖縄を紹介する機会がもられた際、どんなことを伝えて欲しいかを尋ねた。「あなた達やその周りの人がもし米軍の一員として海外に派遣される時には一度、派遣される地に住む人々の心情を考えて欲しい。またその仕事があなた達にとって誇らしいことであっても、そう思わない人もいることを覚えておいて欲しい。」そう伝えてと私に言った。私はあまりに重い伝言にためらいの気持ちが正直芽生えたが、はいとしっかり答えた。何年間も声を張り上げて訴えてきた彼女の言葉は一言一言胸を締め付けるような説得力があり、絶対に伝えなければと感じた。昼食を終え、佐々木さんと辺野古の浜の方へ行き、まるで鼻の先に位置するキャンプシュワブ(辺野古集落のすぐそばにある米海兵隊の駐屯地)を監視するかのようにつむテントで辺野古基地建設から見える日米の関係性、両国の企み、長年その犠牲となって来た沖縄の姿を写真と一緒に説明を受けた。衝撃的であった。無知な自分に呆れるともに、沖縄に住む若者のほとんどがこの事実を知らないでいることに恥ずかしさを覚えた。そのテントで夢中になって話を聞いていたため、座り込みの現場に居ることができなかった。直接参加することはできなかったが、2004年から今まで受け継がれてきた座り込み運動の様子を写真で見た。機動隊に腕を捻られる者、引きずられる者、羽交い締めされ頸椎を損傷した者などその現場は写真からでも十分に伝わる激しさだった。中でも忘れられない写真がある。一枚は機動隊員と向き合い、涙を一滴流す男性の写真だ。その目は憎しみと悲哀を訴えていた。もう一枚は機動隊員と向き合い顔を見つめる88歳のおばあさんの写真だ。戦争を体験した彼女の隊員を見つめる顔に表情はなかったが、怒りや願い、憎しみの感情が隠れていることが見て取れた。

私たちは虚構の中で生きているのかもしれない。平和な世に生まれ戦争を無縁に感じている。真実が隠された世界で平和な世の中だと謳いながら生きる私たちはこのままで良いのだろうか。私は今回の運動に参加をするまで、辺野古周辺で座り込みをしている人たちが県警察ともめる過激な写真を新聞やニュースで見て、少々怖いといったイメージを勝手に持っていたが、実際に見なければ決して解り得ない雰囲気はそこにはあった。辺野古新基地建設について、今日様々な解釈や意見が世間に縦横している。以前ツイッターでこのようなコメントを発見した。「辺野古周辺の住民は多額のお金を受け取り基地建設には賛成が多数である。」「辺野古基地建設反対座り込み抗議をしているのは沖縄県民でなく本土から来た人たちや在日韓国人である。」「実際沖縄県民は過半数が基地に賛成である。」それら全て沖縄県民でない人が書き込んだものであった。その頃の私はこれらの偏ったコメント

に懐疑的ではあったものの、何が正しく何が間違っているのかが全くと言っていいほどわからなかった。実際に現地に行き、そこにいる人々にインタビューをしていくうちに頭に広がるいくつかの穴が次々と埋められていく感覚だった。沖縄県は県民投票や知事選挙などを通して確実に辺野古基地移設反対の意を表してきており、実際私が見た抗議をする人々は9割が沖縄県民であり、その中には沖縄戦を生き抜いたお年寄りも多数いた。話を聞くと毎回の参加者はほとんどが辺野古住民を含む沖縄県民、そして本土や海外から駆けつけてきてくれる人もいるそうである。決して彼女たちの運動は過激なものではなく、子や孫のため、若い者たちの未来のために闘っていることがわかった。百聞は一見にしかず。まさにそれを感じた。「真実を知りたいならば、自ら体験してみろ」私が今回得た教訓である。膨大な情報が行き交うこの時代だからこそ情報の取捨選択が必要となってくる。私は今回住民の方々から得た情報を完全に鵜呑みにする、というようなことはせずにあらゆる場所であらゆる人と対談することを通して情報を整理し、筋の通った意見を培っていこうと決めた。

また今回この運動に参加して気づいたのは、若者がいないということだ。この座り込み運動は2004年から伝統として受け継がれてきたものであり、工事完全中止といった結果まで追い詰めた歴史がある。彼らがいなくなれば私たち世代の時代であるが、果たして組織として成り立つほどの人数がいるであろうか。こんな長閑で綺麗な島に生まれてよかった、平和な日本って最高。私たち世代だけでなく、そう思いながら生きる大人も少なくないだろう。未だに私もその一人なのかもしれない。留学のために自分の地域のことを学びたい、そう思い今回の運動に参加したが、私は果たして学んだことを簡潔にまとめて現地の人々に伝えられるだろうか、また伝えるべきなのか、そんなふうに戻りのバスでは迷いと葛藤があった。しかし私は事実を知ってしまった。私が生まれ育った地がこれまでどのように扱われてきたのか、今後どのくらい危険な地に変化していくのかを。一度その真実を知ってしまえば聞けなかったことにはできない。逃げていてはいけないと思った。私は東京の高校生でもなければセンター試験を控える受験生でもない。自然豊かな沖縄の田舎で育ち、県費留学という形で10ヶ月間のアメリカ留学のチャンスを得た交換留学生である。その立場を改めて確認すると、何もしないでいることに後ろめたさを感じざるを得ない。私には沖縄の現状を沖縄外に伝える使命がある。今回の留学期間中に、沖縄の存在、在沖米軍基地問題、沖縄の人々の思いを恐れずに伝えようと思う。偏った意見を論じるのではなく、今ある現状を率直に伝えることが私の使命だ。そして帰国後、本土に進学した際にもその活動をしようと思う。今回様々なことを教わった抗議運動の人々の目には、私への期待がうかがえた。彼女たちの為にも、留学費用を支援してくれる沖縄県の為にも、少しでも世界へ広めるという形で貢献をしたい。沖縄から世界へ。私がこれから挑む留学には、自身の向上だけでなく、そのような使命があるということも目的の一部であることを肝に銘じ、10ヶ月間奮闘しようと思った。そして確かな知識を育むまで、私は学び続ける。

